

研究主題

「新学習指導要領における特別活動の展開」

～集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせる実践を通して～

平成の時代が終わりのときを迎え、令和という新しい時代が幕を開けた。誰もが思いを馳せるこの新しい時代には、どのような未来が待っているのだろうか。世界情勢がこれまでにないスピードと規模で変化を続けている現在、世界共通のツールとなったITは、私たちの生活に大きな変化と影響を与えている。価値観の劇的な変化が続いている中で、私たち教師は、何を考え、何を子供たちに伝えるべきだろうか。今こそ子供たちと共に新たな時代をつくり上げていくという教育観を胸に、学校の役割を今一度、見つめ直していくことが必要である。

学校には、社会の変化に対応できる力を育むという大きな役割がある。それは、新しい知識や技能の習得だけではない。コンピュータの能力が人の知識量や技術力を上回ると予測されるこれからだからこそ、人として大切な資質・能力を磨き、高めていくことが必要なのである。例えば、あらかじめ正解のない問いや自ら設定した課題に挑戦すること、創造性を重視すること、思いやりや慈しみの心を大切にすることなどは、むしろこれまで以上に求められるといえる。子供たちにとっての社会である学校の役割は、まさにこういった資質・能力を高めていくことである。そして、こうした役割の根幹を担っているのが、集団活動、実践的な活動を特質としている特別活動であるといえる。

本会では、新学習指導要領先行実施の1年目となった昨年度、研究主題を「新学習指導要領における特別活動の展開」とし、“私たち”を主語に、考えを語れる子供の育成を目指して研究を進めた。その際、すべての教科・領域を貫く資質・能力の3つの柱（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力、人間性等」）を踏まえて、各専門委員会を中心に、一人一人が実践的な活動を行ってきた。

その成果として、①新学習指導要領上の各活動・学校行事の特質、②各活動・学校行事における学習過程の基礎・基本が実践の充実に不可欠であること、③育てたい子供像を明確に描き、その重点となる資質・能力を実践ごとに明確にすることの重要性、等を確認することができた。

課題としては、①これからの教育活動における特別活動の教育的意義、②特別活動ならではの見方・考え方を働かせる指導の工夫、③義務教育9年間を見通した特別活動の円滑な接続方法、等をより明確にしていく必要がある。

そして、先行実施2年目となる今年度は、引き続き、新学習指導要領と向き合うことに重点をおきながらも、昨年度の研究を礎にテーマをより焦点化し、研究をさらに深めていく。焦点化するにあたっては、これまでの成果と課題を踏まえ、特別活動で育成を目指す資質・能力を育むための手立てや方法について、より一層考えていきたい。そのためには、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が重要である。特に、特別活動ならではの見方・考え方である「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせて活動できるようにしていくことが欠かせないと考えている。

こうしたことを踏まえ、今年度は研究主題を「新学習指導要領における特別活動の展開」とし、副題を「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせる実践を通して」とした。資質・能力を育むためには、「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせながら実践を進めることが重要である。この「見方・考え方」とは以下のようなものと考えられる。

- 多様な立場や考え方を理解したうえで認め合おうとする見方・考え方
 - 互いのよさを生かすような見方・考え方
 - 様々な集団や社会に参画し、主体的に問題を解決しようとする見方・考え方
 - 自己の在り方生き方を考え、設計しようとする見方・考え方
- 等

そして、研究を進めるにあたっては、次に示す二つの内容を中心に、専門委員会ごとに研究の視点を設け、それぞれの実践において、より具体的な手立てや方法の在り方を考えながら進めていく。

一つ目は、「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせる実践を展開するための全体計画や年間指導計画、一単位時間等の指導計画」についてである。各活動・学校行事の特質を踏まえ、主体的・対話的で深い学びの実現を図る指導計画について研究していく。以下は、その留意点である。

- ①「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の視点に立った指導計画を工夫する。
- ②各活動・学校行事相互の連携、教科等との往還的關係を意識した指導計画を工夫する。
- ③各学校・子供の実態や、小中学校9年間における発達の段階をおさえた指導計画を工夫する。

二つ目は、「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせる実践における指導と評価の方法」についてである。指導と評価の一体化に重点をおいたこれまでの研究を生かし、各実践において育てたい資質・能力を明確にしたうえで、その指導の在り方と評価方法について研究を深めていきたい。以下は、その留意点である。

- ①「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の視点に立った指導と評価の在り方を工夫する。
- ②自分もよくみんなもよい合意形成や意思決定の機会があり、実践につながる学習過程を工夫する。
- ③個を集団活動の中で埋没させないための指導と評価の在り方を工夫する。

特別活動で育成を目指す資質・能力は、一朝一夕で身に付けられるものではない。特別活動ならではの見方・考え方を働かせて活動する経験を、確実に積み重ねることで、やがて身に付くものとする。それには、中・長期的な計画と視野をもち、教育活動全体における特別活動の在り方を認識しながら実践を続けることが不可欠である。その中で、生徒指導や道徳教育、学級経営やキャリア教育の充実についても、本質をおさえた特別活動の実践と関連して進めることが重要であることも押さえていく。

研究は机上のものではなく、実践のためである。そして実践は子供一人一人のためである。子供とともにつくっていく新しい時代において、私たちは学校の役割を改めて見直す必要がある。そして、学校だからこそ育むことのできる資質・能力を明確にし、特別活動の一層の充実を図っていくことが、未来を生きる子供たちの幸せにつながると信じている。